

小田実全集（小説 第27巻）

民岩太閤記（上）



講談社

小田実全集

Makoto Oda



|       |                           |     |
|-------|---------------------------|-----|
| 第十二章  | 海上はるかをめざす巻……………           | 212 |
| 第十三章  | トン坊、鳥嶺の険を越えるの巻……………       | 230 |
| 第十四章  | 氏素姓と大土木工事の巻……………          | 249 |
| 第十五章  | 大同江見参の巻……………              | 265 |
| 第十六章  | 平壤「平安」逗滞の巻……………           | 282 |
| 第十七章  | ミン坊、ツヅラからいくさに初見参するの巻…………… | 298 |
| 第十八章  | ウォルヒャン様と対面の巻……………         | 315 |
| 第十九章  | 妓生・石將軍「ひとり義兵」の巻……………      | 334 |
| 第二十章  | 政治浪人・政治ゴロ出現の巻……………        | 354 |
| 第二十一章 | 「日増しに味方は薄くなる」巻……………       | 370 |

「民岩太閤記」関係地図





本文挿絵・玄ヒヨン  
順恵スンヒエ

民岩太閤記  
(上)

「民岩之可畏如是矣」  
（姜沆 『看羊錄』）

## 序 章

一

何んの関係もないようなことから書く。

もう何年もまえのことになる。東南アジアを旅して歩いたときの話だ。

インドネシアの有名な週刊誌に、「テンポ」というのがある。週刊誌と言っても、裸の女性の写真やスキヤンダルの記事で売っている雑誌のことではない。ニュース雑誌で、言ってみれば、アメリカ合州国の「タイム」だ。表紙も編集の仕方、「タイム」そっくりである。それも道理、「タイム」を真似て、「テンポ」はできていた。「テンポ」という題名も、「タイム」から来ている。つまり、インドネシア語で「時」<sup>タイム</sup>ということだ。

インドネシア語を知らない私には中身はまるつきり読めないから保証のかぎりではないし、今はどうなっているか知らないが（まだ出ているはずだ）消息通の人びとの評判ではアメリカ合州国の「タイム」より政治傾向は数段進歩的だということであった。あるいは、これは逆に、インドネシアの政治風土のなかでは、「タイム」ごときものでも、進歩的とならざるを得ない、あるいは、そうみなされざるを得ないということであるかも知れない。編集部を訪ねて二、三人の記者としゃべった感想から言えばそういう印象になるが、「テンポ」は政府にいらまれてつぶされかかったこともあったし、

たしか主筆も投獄のうき目にあっている。

ただ、私がここで書くこうとしているのは、そちらのほうのことではない。「テンポ」は、さつきも言ったとおり、「タイム」そっくりの姿かたちをしている。表紙にも、「タイム」のように、なかで記事になっている人物の顔が大きく出たりする。たいてい「時の人」の顔である。私が何年かまえ東南アジアを旅して歩いていたところに、見慣れた日本人の顔が「時の人」として大きく出ていた。写真だったか、絵だったか、それは忘れたが、とにかく、街の雑誌売場で、派手に扱われている彼の顔を何度も見かけた。

それが誰だったかは、私がジャカルタの街で輪タクの運転手と交した会話を書けば、すぐ判明することだろう。たまたま英語のカタコトをあやつる運転手に、私は行きあつていた。

「あなたは日本人だろ。あなたの国はいい国だね。」

「どうしてかね。」

「小学校しか出ていない男が総理大臣になれるんだから。おれの国では、絶対にそんなことはないよ。」  
彼は本当に羨望に満ちた眼で言った。

総理大臣になったばかりの田中カクエイ氏のことは、そのころ、ジャカルタに限らず、東南アジアのあちこちで話題になっていた。それも、輪タクの運転手のようなチマタの人ちゅうのチマタの人のなかにおいてである。もちろん、カクエイ氏の政治傾向、「日本列島改造」のような彼の哲学、政策を彼らが論じていたわけではない。まして、彼の金権的体質をとやかく言いあつていたのではない。そんなことは、「今太閤」として彼をさかんに持ち上げていた当時の日本の新聞雑誌も書かなかつた。

のだから言うはずはない。カクエイ氏がアジア旅行に出かけて、あちこちで学生たちがデモ行進で迎えるというようなことは、もう少しあとで起こったことだから、話題はそちらのほうのことでもなかった。

話はもつぱらカクエイ氏の出自のことに集中していた。つまり、小学校しか出ていない男が、アメリカ合州国、ヨーロッパに伍しての大金持ち国、「先進大国」の総理大臣になったということについてはある。よくもまあなれたものだということから、おれの国、おれたちの国ではそんなことはあり得ない。話はそういうぐあいになる。そこに行きつく。

もちろん、日本をバカにして言っていたことではなかった。さつき書いたジャカルタの輸タクの運転手のように、だから、日本はいい国だと結論はそういうことになっていた。

なるほどカクエイ氏という人物、日本人にとつてだけ、「今大閣」であるのでなく、アジアの人にとつてもそうあり得るのだと今さらのように思ったのは、そのときのことだ。アジアの人と言つても、輸タクの運転手のようなウダツの上がらぬ社会の下のほうにいる人たちである。私の言い方をすれば、まったくのチマタの人びとである。少しかまえて言えば、民衆である。

そういう人たちにとつて、小学校しか出ていない男、つまり、自分の同類のような男が自分の国より格が上の——そう彼らの目に見えている「先進大国」の総理大臣になる、なり上がるというようなことは、何ほどかの快拳であったにちがいない。何か胸のつかえがおりるようなユカイなことでもあれば、いつも自分たちが踏みつけにされている自分の国のえらいさんたちに対する意欲ばらしの感じのすることであつたかも知れない。そういう自分の国のえらいさんより、日本という「先進大国」の

総理大臣は格が上で、その格の上の人物に小学校しか出ていない、自分と同類のような男がなる、なり上がる。(ぎまあみやがれ)とまで彼らが思ったのかどうか、そこまでは知らない。ただ、カクエイ氏、そのころいつとき、アジアの民衆にとつての「チマタの英雄」であり得ていたのではないか。

こういうことのありようは、カクエイ氏を当時「今太閤」としてもてはやした日本の内部の事情によく似ている。小学校しか出ていない男が東大出の秀才どもがガツチリと支配を固める権力の頂きに立つて、逆に秀才どもをアゴで使う。これはそれこそ「ニイガタ県」の人ならずとも、あまたのチマタの人にとつて何かしら小気味よいことであつた。そして、世に「ニイガタ県」はまことに多いものだ。日本ばかりにあるのではない。世界にもあまたあつて、「ニイガタ県」は、どこでどうあれ、それぞれに自らの「ニイガタ県の英雄」を必要とする。

つまり、「英雄」はカクエイ氏でなかつてもよかつたということだ。その証拠に、カクエイ氏のことを言い出したジャカルタの輪タクの運転手は、彼の名前を知っていたわけではない。ただ、「小学校しか出ていない男が……」とだけ言つた。

## 二一

正直に言つて、私は「太閤さん」のことなど、長いあいだ、頭の外に放り出して生きていた。小学校以来——いや、私の入つた小学校は後半「国民学校」と名を変えていて、卒業したのはたしかに「国民学校」のほうだから、これは国民学校以来と言ふべきかも知れないが、とにかくそんな年齢からのことだ、「太閤さん」を私が頭の外、つまり、私の世界の外に放り出して来たのは。——

「太閤さん」は、とにかく昔はえらい人だった。「国民学校」の「国史」の教科書で私は何を習ったのかよくおぼえていないが、とにかくえらい人だったということになっていた。ただ、子供のときは、いや、年をとつてえらくなつたあとも、サルのような顔をしていて、背丈も小さい。その小さい、サルの顔をしたのがいぼつて歩く。ゾーリ取りをしていたときには「日本一のゾーリ取り」になろうとして、主君織田信長のゾーリをふところに入れてあたためた。しかし、「天下一統」なしとげて「天下人」となつてからは、豪華ケンランの御殿をつくり、大花見、大茶会をし、えらい人であるがどこか人間臭く、にくめない。それに反して徳川家康は……というぐあいに私の「太閤さん」理解はなつていたのでろう。

ことに、私が生まれ育つた大阪というところは「太閤さん」ゆかりの地であつて、「太閤さん」びいきの有形無形の教育を私は受けていた。大阪城の天守閣は、たとえ鉄筋コンクリート造りのインチキ城にしろ、私の家からさして遠くないところにそびえていたし、大阪、いや、大坂夏の陣の古戦場茶臼山も子供の私のほつき歩きの行動半径のなかにあつた。

それがバツタリ「太閤さん」に縁が切れた形になつたのは、戦後、民主主義はやりの世の中、ああいう独裁者は人気がなくなるのは必然だつたのか。そこにつけ加えて、やはり、彼には「朝鮮侵略」といういまわしい経歴もあつて、「太閤さん」が私自身をふくめて世の中の人びとの視界から消え去つてしまつたからだつたにちがいない。いやなものにあたかもなかつたようにするのが、人の世の常というものだろう。考えてみると、戦後の新制度の教育のなかで、私は中学、高校時代、彼のことに ついても教えられたにちがいないが、「太閤さん」は私の思考に何んの痕跡もとどめなかつたこと、こ

れもたしかな事実だ。戦後の教育のことだから、彼の「朝鮮侵略」についても教えられたにちがいないが、そういうこともよくおぼえていないのは、この場合、今でもそのあたりを簡単にすませているくらいがある教科書や教え方に問題があるというよりは、「太閤さん」それ自体について触れるのが教師も生徒もどこか気が進まなくていいかげんにすませてしまったという事情があつたのではないか。そして、「太閤さん」にどんなかたちであれ、とにかく触れたのは、そのときが終わりで、あとはまるつきり縁が切れた。あと何年、無縁にくらしたことになるのか。それが、あるとき、突然、「太閤さん」が私の世界のなかに躍り出て来ることになる。

一九六三年、私は、韓国へ行つた。なぜ、どのようにして韓国へ行つたか、このあたりの理由、紆余曲折については本題に関係ないので書かない。問題は「太閤さん」のことだ。

突然、彼が出て来たのは、古都慶州へ出かけたときのことだ。仏国寺という高名な古寺がある。観光地としても著名で、韓国を訪れ、慶州を訪れた人なら、まちがひなく訪れる古寺だが、いざ行つてみると、たいした規模のものではない。「へエ、もつと大きいものかと思つた」と思わず言つたら、案内してくれた人がすぐ言つた。

「お国のヒデヨシが焼いたのですよ。」

それからあちこちで、私は「お国のヒデヨシが焼いたのですよ」にお目にかかることになる。いや、あれはまさにあちこちというものであつた。しまいに悲鳴をあげたくなつた。それは、いやおうなしに「太閤さん」に再会することであつた。そして、その再会の仕方は、えらいさんではあるがどこか人間臭い、人なつつこい、親しみのもてる、まさに「太閤さん」という気やすい言い方がふさわしい

サル面の男との再会というわけにはいかなかった。いや、男のサル面は変わったわけではない。サル面はサル面のままで、放火犯、放火殺人犯になっただけの話だ。その国の歴史区分に、「ヒデヨシ以前」「ヒデヨシ以後」という区分があるのを知ったのもそのときのことだ。韓国人の学者の書いた歴史を英訳で読んでいたら《Before Hideyoshi》《After Hideyoshi》というのが出て来た。そのとき私が感じた名状しがたい衝撃の深さは、いまだにその英訳の文句の文字面までありありとおぼえていることと判るだろう。その文句はそのままそのあとずつと私についてまわることになる。私にとつて、まさに「以前」「以後」となったわけだが、それを私の「ヒデヨシ以前」「ヒデヨシ以後」と言つて言えないことはない。

## 三

「北朝鮮」（朝鮮民主主義人民共和国）に妙香山という「名山」がある。ピョンヤンの北、直線距離にして百キロほどに位置して、海拔二千メートル近い急峻な山嶺が峨々としてつらなる一連の山脈である。ミドリあくまで濃き山嶺に鋭く切り込んだ峡谷のあちこちに滝があざやかに水流の白色のきらめきを見せてかかつて、たしかにその名に恥ずかしくない美麗にして深遠なおもむきを見せる。「名山」には「名山」にふさわしくあまた寺があるが、朝鮮の各地を歩いたのち、妙香山に三十八年間定住して死んだという、いわば、「名山」の「開祖」の西山大師<sup>ソサンデサ</sup>は、朝鮮では妙香山をふくめて「四大名山」と呼ばれる他の「名山」にふれてこう言った。智異山は、大きいけれど風格に乏しい。金剛山は美しいが大きい。九月山も同じ。それら三山に対して、妙香山は金剛山の美、智異山の雄大、すべて

をあわせもつて言うことなし。これで「四名山」にかかわつての大師の評言はすんだわけだが、朝鮮の他の山嶺、たとえば中国との国境にそびえ立つ海拔二千七百メートル余の最高峰の白頭山はどういうことになるか。あれは高すぎて、人間がいらない——ということになるらしいが、こちらの言は、はたして西山大師の言つたことばなのか、それとも大師の言を紹介してくれた妙香山の案内役氏が言つたことなのか。そのあたり、たしかめるのを忘れてしまった。

ともあれ妙香山は「名山」である。山高く、水清きの景勝の地である。「名山」の山ふところのあちこちのほどよきところに旅館がちらばり、各地からやつて来た、そして私のようにはるばると異国から来た旅人も泊まつて、あちこち山中を見物して歩く。移動の自由乏しき「北朝鮮」でもこのごろは「グループ旅行」ならかなり許されているらしくていろんなグループに行きあつた。東部からやつて来た工場の仲間だという一団、山道で行きあいがてら「何日いるのか」と訊いてみると、なかにいたおばあさんは「二日ですよ」と日本語で答えた。何十年ぶりで、彼女は日本人と会つて日本語をしゃべつたことになるのか。みんなの写真を撮りたいと言つたら、先に行つていた仲間まで呼び集めての記念撮影となつた。

もうひとつ面白かつたのは、一杯きこしめして御機嫌さんの兵隊さんに出会つたことだつた。いい御機嫌、いい声でうたいながら山道を駆け降りて来る仲間づれがいると思つたら、なんと軍服姿の人民軍の兵隊さんだ。先方から手をさしのべて来て堅い握手となつたが、若い兵隊さんの握手である、こちらは手がしびれるほど痛かつた。もつとも気のいい兵隊さん、持っていた大きなキノコを惜しげもなくくれて、手の痛みのつぐないはしてくれた。「名山」のどこかで見つけて来たにちがひなかつ

たが、旅宿に帰って焼いてもらって食べたその味、「名山」のキノコにふさわしいものだった。名物にうまいものなし、のたぐいのことを言おうとしているのではない。たしかにうまかったのだ。

この「名山」には、さつきも言ったが、あまた寺がある。いや、昔のことだからあったと過去形で正確に書いておくべきことだろうが、その数二百四十三。一〇四二年にはそういうことであつたそうで、「名山」の山中にはいまだ発見されざる古寺があるそうだが、現代に至つてお寺をぶつこわした元兇は社会主義にあらずして「国連軍」という名のアメリカ合州国軍であつたことは、「北朝鮮」の名譽のために言つておこう。金剛山の場合でもそうだが、あちこちお寺は廃墟になつていて、この場合「ヒデオシが焼いた」のではなくて「アメリカが焼いた」。いや、ことは朝鮮全体にひろげて言えば、「ヒデオシも焼いた」が「アメリカも焼いた」ことになるのか。

妙香山でも、アメリカ合州国軍の爆撃によつて十四のお堂が焼け、一万体の仏さんが燃え上がった。たしかに残つたお寺のお堂を見ていても、あつちこつちに飛行機の機銃弾の弾痕が見える。こういう昔の遺跡、あるいは遺跡めいたものに現代のおぞましさがもろに顔を出すのを見るのは、何かしら奇妙なものだ。レバノン南部のローマ時代の遺跡テイルをいつか訪れたとき、それよりさらに以前に訪れたときにはちやんと切符売り場もあつてまさに観光用の遺跡の観を呈していたのが、いつなんどき弾丸が落下するかも知れない戦場になつていた。私もそのあたりまでパレスチナ解放闘争のたたかいのさまを見に行つたので遺跡見物に出かけていたわけではない。ただ、昔、ローマのもろもろをふくめて西洋の古典を勉強したことのある私としては、せつかくローマ時代の遺跡を眼前にしてそのまま帰るのもシャクである。危ないからよせとの声をふりきつて、大理石の円柱建ち並ぶ海のそばの遺

跡を大急ぎで駆けまわった。切符売り場はあったが、もちろん無人で、それ自体が現代の遺跡になっていた。当然、無料で入ったわけだが、それにしても、遺跡というだけだつ広いものほど、すべてがむき出しの「オープン・スペース」なのだから、あれほど危ないところはない。砲撃が始まって弾丸が落下し出したら、身を隠すところなどどこにもないのである。大慌てで走りまわって見物をすませたのだが、それにしても、古代遺跡の大理石の敷石、柱に近代兵器の弾丸がぶち当たる光景ほど奇怪でコッケイなさまはないだろう。妙香山のお堂に射ち込まれた機銃弾の痕にもその二つの感じがあった。

アメリカ合州国軍の爆撃にかなり傷めつけられたのを復旧して、今、お寺として機能しているのが、妙香山の諸寺の本山とでも言うべき普賢寺である。門はこれは焼かれたのを復元したものだという話だったが、手ごろな大きさの山門で、それだけ見ていればさしたる大寺に見えないが、門をくぐったあとお寺の奥行きは深く、いくつもお堂がつづきもすれば横にも境内は大きくひろがって、なかなかの大寺だ。

私は朝鮮の古い建築が好きだが、それは、そういうお堂のつらなりが軍隊の整列みたいにまっすぐ一直線に並んでいたりしていないことだ。あっちこっちに出ばったり引っこんだりして、全体に均整がとれていない。山門に立って奥を見ると、お堂がてんでんばらばらに思い思いの方向にむいているような気がする。日本でなら、こういう建築をつくった建築家なり大工なりは何をズサンなことをやったのかと指弾されるにきまっているが、朝鮮の古い建築の場合、こちらのほうがふつうなのである。こういうジグザグ——と言うよりはのらりくらの建物の並べ方は全体に奥行きをつけるための

ものだという話だが、そんなふうに理づめに考えるよりは、ただ、そこにはそういう遊びがあるのだと考えたほうが、この場合の解釈としていいのではないか。万事一直線にきちんと整備されているより、どこかに野放図に間尺のあわないことがあつたほうが、人間味がある。すくなくとも、こよなく人間の精神、行動の自由を愛する私のような規則ぎらいの人間にとつてはそうだ。

話を戻す。まさに私のこの物語自体、朝鮮の古い建築式にあつちに行つたりこつちに戻つたりして間尺のあわないものになりそうだが、さて、とにかく、普賢寺のことだ。

さつき言った西山大師ソサンデサヒュジョン休静は一五二〇年に生まれ一六〇四年に没した屈指の名僧と言われた坊さんだが、朝鮮各地を歩いたあと、妙香山に来て、普賢寺に入り、あと没するまで三十八年間、この山中の寺で一生を過ごすことになる。しかし、この坊さん、ただ修行三昧にくらした坊さんではなかつた。彼が名僧のほまれ高いのは、秀吉の「朝鮮侵略」に対して、全国の坊さんたちに「檄げき」を飛ばし、自ら、義兵闘争の先頭に立つてたかつた人物であつたからだ。

秀吉が一五九二年四月に侵略を始めて以来、小西行長、加藤清正の率いる第一軍、第二軍を先鋒として日本軍が次々に勝利を重ねながら進撃して行つてわずか二週間余で漢城ソウルを陥し、さらに六月には小西行長の第一軍は平壤ピョンヤンに入る——という朝鮮側にとつてまことに情けない事態になつたところで、腐敗墮落した李朝政府軍たのむにたらずとあつてさまざま義兵闘争がようやく起り始めるのだが、そのうちのひとつに普賢寺の主の西山大師が率いる坊さんたちの義兵闘争があつた。

まず、西山大師は当時すでに齡よわい七十を越した身でありながら、平壤まで出かけて、占領下の平壤のさまに悲憤慷慨、全国のお寺に「檄」を飛ばすと同時に、自分で錫杖をもつて行脚の旅に出かけた。

その甲斐あつて、千五百人の坊さん部隊をくり出すことに成功したのだが、彼自身、先頭に立つて、李如松の率いる明軍、朝鮮軍の連合の平壤攻撃に参加する。これは、日本軍をあなどつてみじめな失敗に終わった一五九二年七月の攻撃のあとの、準備万端ととのえての本格的な一五九三年一月の攻撃のときだったが、ここで彼の千五百名の坊さん部隊は、彼の「檄」に応じて金剛山からはせ参じて来た彼の弟子、松雲大師ソウウンデサユジョン惟政の率いる八百人の坊さん部隊とともにめざましい働きをした。そのあと実際の部隊全体の指揮は、加藤清正との談判を皮切りに日本との和平交渉に至るまでの局面でも活躍する松雲大師にまかせて普賢寺に隠退——と言われているのだが、要するに彼は後方で全坊さん軍を叱咤激励していたのだろう。一六〇四年に弟子を集めて説教をしたのち、ふざ跌坐したまま八十有余歳にして大往生をとげた。墓はもとは山中にあつたのだが、これもまたアメリカ合州国軍の爆撃で跡かたもなくなつた。またしても、遺跡に対する爆撃である。

西山大師は、その錫杖をふるつての義兵決起の行脚のあいだ、坊さんの身をもつて殺生を説くとは何ごとだと坊さん仲間から反対にあつたようである。そのときは山中でしゃべつていたのだが、折しも小鳥にケダモノが襲いかかろうとしているのが見えた。「あれを見て放つておけるかね、諸君。」彼はそう言つた。そういう話である。

松雲大師惟政は、またの名を四溟堂サアツゲンと言つて、西山大師の弟子だつた。あちこち修行して歩いて妙香山に来て、ついに西山大師に心服して弟子となり、のちに金剛山にこもつたのだが、加藤清正のところへ出かけて談判している。朝鮮に宝物ありやと清正に訊かれて、おまえの首こそ朝鮮の宝物な

りと清正に言つてのけたりしたのも、小西行長が秀吉をだまくらかしているとバクロしたのもこの坊さんだが、小柄な西山大師に対して、彼は大男だった。彼は紆余曲折いろいろあつて西山大師に会い、「弟子にしてくれ」と言つたあと、おれはこれからこんなチツポケな坊主の弟子になるのか、おれがこいつを弟子にとつてもいいくらいだと思つた。とたんに西山大師がふり返つて、「それじゃわたしがああなたの弟子になるよ」とニコニコしながら言つた。それで完全に大男の坊主、小男の坊主にカブトを脱いで西山大師に心服するに至つた。いや、そういう話になつてはいるのだが、普賢寺の境内の小さな博物館には、西山大師が行脚のときに使つた錫杖の頭の部分と彼の刀とカブトが残されていた。どちらもガラス箱のなかの展示は模造品だったが、「本物はここにはないんですか」という私の質問に、館長さん（だと思ふ。要するに、お寺のえらいさんだ）は、「ありますよ」と答えてから、「じゃあ、見せてあげましょう」と、ことは意外な展開を見せた。

持つて来たのは、まず、長さ二十センチほどの錫杖の頭部だ。てつぺんに小さな四重の塔の飾りがつき、輪の中心にアミダ仏があるその頭部をふつてみると、たしかに半分こわれた輪につけたかな輪が鳴つていい音がする。なるほど、この錫杖をふつて、西山大師は祖国、民族の悲劇を訴え、決起を説いたのかと思うと胸苦しくなつたが、それはもちろん彼が説いた決起の相手が、私とは同じ日本人でありながら、縁もユカリもないはずの、しかし、また、縁もユカリもないはずながら同じ日本人であるという一事によつて私もそこにつながつてもいる日本軍であつたからだ。

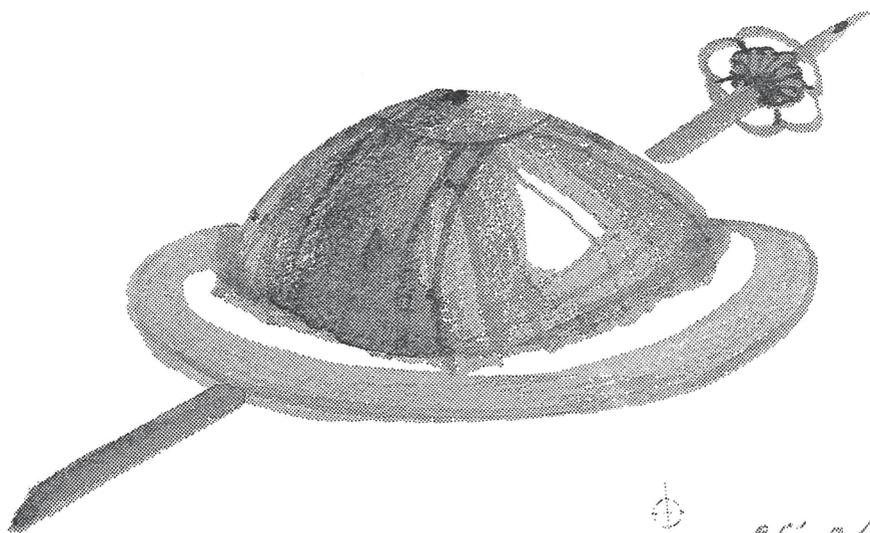
四溟堂のカブトは、大男だつたというこの坊さんにふさわしく大きなカブトだつた。と言つても、日本侵略軍のえらいさんたちがつけていたにちがいない日本のカブトのようにこけおどしにいろんな

飾りをつけたカブトではない。まるで現代の軍隊の鉄カブト——と言うよりは工業用のヘルメットのようには何んの飾りもついていない武骨なつくりのカブトであった。直径が三十センチ、高さが十七、八センチ、ツバの広さが五センチと見当をつけたが、完全な円形ではない。少しばかり左右に長い楕円形をしている。

刀は長さ六十センチほどのものだった。日本刀と全体のかたちは似ているが、切っ先は鋭くない上に刀身は厚くて、日本刀のように刃の鋭さで一刃両断に切り捨てる刀ではなくて、中国の刀のように力ぶった切る刀だろう。眺めたり、さわったり、写真に撮ったりしているうちに、かぶつていいですよと館長さんは言い出す。すすめを無下に断るのもわるい気がして、私はカブトを頭につけてみたのだが、なかなかの重さだ。刀もさし出されて持つてみたが、こちらもかなり重い。

同時に何やら名状しがたい気持ちになったのは、カブトをかぶり、刀を手に行っているのが、四溟堂がかつてこのいでたちでたかかった相手の国、民族の間であることだ。他の場合だったら、私はおどけて刀をふりまわしてみたりしたにちがいないが、そのときにはそんなことをする気になれなかった。四溟堂もあの世で苦笑しているにちがいない、「まあ、おっさん、怒らんといてや」と、大男、大アタマ（だっただろう、たぶん）の彼の顔らしいものが勝手に眼に浮かんで来ていたが、私はその顔にむかつて言った。この場合の「おっさん」は、街の人にむかつて気やすく呼びかけるときの「オッサン」でもあれば、関西の人間がよく口にする「和尚さん」と言うときの「おっさん」でもある。

普賢寺から険しい山道をあえぎあえぎ登って、西山大師が修行に籠もっていたという金剛窟まで足を延ばした。朝鮮戦争中には、そこにこのお寺の宝物として名高い「大蔵経」を疎開させておいてい



95' 2/26

たという「高厳庵」という名の小さなお堂が、突き出た大きな岩の下に建てられていて、それが金剛窟だが、前庭（と言つても、ただの平地だが）に木槿むくげ、鳳仙花、ヒマワリ、山ユリ、朝鮮菊その他の花々が咲き乱れる小さな庵に西山大師はずつと住んでいた。そこには今は初老の男がひとりで番人を兼ねて住んでいるだけだが、かつては都会で技師か何かをしていたその男もガンにかかったのを自然のなかに生きることと回復させようとしている男だった。「北朝鮮」にもそんな人物がいるのかといささかおどろいたが、その「高厳庵」にいた西山大師に会いにやって来たのが、四溟堂だった。

粗末な庵のなかに坐つて外を見ると、谷を隔てて前方に山脈がづらなつて見える。あくまでミドリ濃い姿だが、ひとときわ高いのが「白山」という名で呼ばれているのは、朝がた、まず陽光がそこにあたつて白く光つて見えるからだと言う。夜、月が出ると、大きなぬれ縁を入れて奥行き五メートル、長さが十メートルほどの小さな庵のなかまで明るくなる。西山大師はその月の光の下で、決起の「檄」の想を練っていたのか。

四溟堂は、ここにやつて来たとき、たもとに鳥を一羽入れて来ていた。庵の外に立つて、この鳥を放してやるべきか、このまま捕らえておくべきかと、なかの西山大師に向かつて言った。

「あなたをこの部屋で扉を開いて、そのまま坐つて迎えるか、それとも外に出て迎えるか、わたしは今迷っているところだ」

西山大師は答えた。

このあたり、まさに禅問答だが、あと庵での二人のあいだにかわされた会話のなかで、四溟堂は、世の中どうも騒がしい、何か起こらねばよいのだが、と言つた。日本軍が釜山に上陸する前年のこと

だった。そういう話である。

「序章」のつけたしとして言っておきたい。この本の題名のあとに掲げた「看羊録」の文句、訳して言えば、「人びと群れ集まって岩となれば、かくもおそるべし」とでもなるか。それとも、「民衆の一念、凝り固まって岩になる。バカにしたらあかんで」となるか。筆者姜沆カンハンは日本軍に捕らわれてさんざん辛酸をなめた朝鮮の儒者である。辛酸のはての一句を使って、この物語、題して「民岩太閤記」——さてこれから、どうなるか。すでに戦争——侵略は翌年に迫っていた。

## 第一章　チリアクタ　有馬の湯の巻

一

兵庫、有馬の山中にトン坊と呼ばれる少年がいた。何んでトン坊と言うのか、よく判らぬが、動作敏捷、山中にあまた棲息する小猿のごとく、日本最古のいで湯の地、有馬に建ち並ぶ宿坊の屋根を、いたずらのあげくトントンと足を踏み鳴らして走って逃げて、このいたずら小僧、とつちめてやれと彼を追う宿坊の下男たちに地だんだ踏ませた。そこからトン坊という名になったというのだが、どうせこういう話はあてにならぬものだ。本名は何んだったのか訊く人もいられるかも知れないが、あの時代、山中の小猿のごとき、つまり、チリアクタのごとき人間に名前があらうと、そんなものは、その、らのただの符丁のようなもの、符丁はそのときどきにチリアクタを使ってくれるえらいさん方の都合によつてつけられ、また、変わるものだから、あれこれ詮索してみたところでたいして意味あることではない。

そこでまずはトン坊、そういう名前での少年を呼んでおくことにしたい。今の世の中だつて、さすがに戦後にはこういう人を馬鹿にしたようなことはなくなつたようだが、ひと昔まえの戦前には、田舎からやって来た女中さんに、彼女の本名はそちのけにして「おはなはん」などと勝手な呼び名

をつけて呼んでいたお邸があつたりしたものだ。

ここでチリアクタのごとき人間という言い方をしてみたのは、この物語の登場人物のひとり、世に「太閤さん」と呼ばれた人物がそういう文句を手紙のなかで使っていたからだ。手紙と言つても、彼が送り出した朝鮮侵略軍のお殿様にあてた命令書みたいな手紙だが、そのなかで、彼は自分たちのやつている「朝鮮征伐」など、まさにホーキでチリアクタを掃いて行くようなことだとのたまわつていた。すでに侵略の緒戦で大勝利を博した直後のことだったから、「太閤さん」の鼻は高いし、そこから出てくる鼻息も当然あらかつたが、彼はそれまでの自らが「天下人」となるための国内のいくさもその伝でやつて来たのにちがいない。彼にとつては名だたるお殿様でも彼の鼻息のひと吹きでたちまち吹き払われるような連中だったから、日本中どこへ行つてもいる、そこらの人間など、まさにホーキのまえのチリアクタのごときものであつた。まして、トン坊、ただの少年である。チリアクタ中のチリアクタであつた。

ここでもうひとつ、ついでに言っておきたいのは、さっきの、「この物語の登場人物のひとり、世に『太閤さん』と呼ばれた人物」というような「民岩太閤記」の作者の言い方についてのことである。「太閤記」と名づけながら、「登場人物のひとり」とは何ごとかといきまぐれ人があるかも知れないが、いや、今どきそんな人はいないだろうが、「太閤記」、上に「民岩」とつく以上は、「太閤さん」も登場人物なら、いや、そのひとりなら、わがトン坊というチリアクタも立派に登場人物——そのひとりなのである。そこは民主的に平等に行きたい。世界にはチリアクタを掃いて捨てるホーキだけが存在しているのではない。チリアクタもあつて、世界は成り立つ。

一寸の虫にも何んとやらという言い方もあってチリアクタにも自慢するものがあつてふしぎはないが、トン坊にも「わしがタカラモノ」と大げさに自慢するものが三つあつた。

ひとつは、まず、十一歳という小わつぱに似ぬ大きくてめつぽう頑丈なからだである。顔はまつたく年相応、まだまだわらべ顔だったが、からだだけは十七、八の若者なみになつていた。それにこのからだ、トン坊の名前の由来で述べたように、有馬山中、小猿と遊んで育つただけあつて、すこぶる動作敏捷にでき上がっている。ここと思えばまたあちら、というような牛若丸的芸当が可能なのである。しかし、こういう芸当は、山中で育つた子供はたいいできることなのでたいして自慢になることではない。それで彼の「わしがタカラモノ」の三つのなかには入っていないのだが、それでは第二番目の「わしがタカラモノ」は何か。

それは温泉であつた。いや、これは昔の物語だから、そこは、やはり、古風にいで湯と言つておきたいが、なにしろこの彼が生まれ育つた有馬の地、日本最古のいで湯の地として知られた在所なのである。有馬のいで湯のことは、すでに「日本書紀」に出ているというのだから、その古さも知れようというものだ。トン坊はもちろんそんな古い時代のことは何ひとつ知らぬし、字など習つたことのない彼のことから「日本書紀」と言われてもチンプンカンだつたにちがいないが、有馬にいくつもあるお寺のひとつ、その名も温泉寺というのが、ギョウキさんというありがたい、えらいぼんさんのつくつたお寺であるということぐらひは父親から聞いて知つていた。ギョウキさんはほんとうにありがたいぼんさんで、日本全国まわりにまわつて、病人を助けるやら、水のないところには持つていた杖をひと突きして池をつくるやらして、病む人、悩む人、困れる人、一切衆生を救つてくれた。

このギョウキさんのお寺はちようど宿坊の建ち並ぶ有馬の山の斜面の街のまんなかにあつて、トン坊もときどき遊びに行つたが、ある日あるとき、なから立派な身なりをしたほんさんが現われて、この汚い小わつぱらめ、何かまた盗みに来たんじやろと杖で邪ケンに追つぱらわれた。同じ杖でもギョウキさんのは大ちがいがだが、そのときいつちようやつたるか、この坊主め、と身がまえたトン坊がぐつとこらえてそのまま立ち去つてしまつたのは、実を言うと、あとに述べる三番目の「わしがタカラモノ」が横にいつしよにいたからである。

しかし、三番目の「わしがタカラモノ」の話をするまえに、言いかけた二番目の「わしがタカラモノ」の話をかたづけておかなければならない。それはさつきも言つたが、温泉——いや、いで湯である。それもトン坊が自分で見つけて、彼と彼の三番目の「わしがタカラモノ」だけの秘密にしている。小さいで湯——彼らのかくし湯であつた。もつとも、彼が自分で見つけたというのは、いささか我慢すぎる言い方になるだろう。ある日あるとき、それはちようど、温泉寺のありがたきギョウキさんならぬ非ギョウキさんの坊主に邪ケンに杖で追い払われた日のことであつたが、彼らがフンマンを胸に押さえ込んで、こういうときはきまつて彼らはしたものだ。が山中にわけ入つて小猿のキツキツと叫ぶ鳴き声に聞き入りながらガムシャラにそれこそ自らがその小猿のごとく谷間を登つて行くと、前方にほんものの小猿が出て来た。あたかも自分たちを先導して行くように小猿は谷間の横手の斜面を駆け登つていつたが、どうも見ていて足の様子がおかしい。どこか怪我をしている模様だつたが、そのうちヒョイと小猿は姿を消した。

いつたいどこへ消えてしまひよつたのかとあちこち二人で探していると、斜面に湯気の立つている

ところがあつて、さて何やらんといぶかしんで行つてみると、小さな水たまりに小猿が痛む足をつけていた。ハハんとトン坊が、これはただの水たまりにあらず、靈験あらたかないで湯だと合点したのは、神代はるかな昔、神様が有馬の地に降りて来たときに、三羽の傷ついた鳥が湯気の立つ水たまりでゆあみしていた。神さまは何やらんといぶかしんだが、そのうち三羽の鳥は傷が治つて飛び立った。ああ、これは靈験あらたかな魔力を持った湯じゃと神様は感じ入つて、それからこの地、日本最古の温泉となつた。この話、これも父親からトン坊は聞いていて、それで、これはいで湯だと大いにならずいた。そして、となりに立つていた三番目の「わしがタカラモノ」に、これは「わしらがかくし湯じゃ」といくさのときのおたけびさながらに大声でよろこびの叫びをあげた。

しかし、叫びをあげられたほうはかんじんの「かくし湯」の意味が判らない。「かくし湯ちゆうのは何んじゃ」という話になつて、トン坊は説明する。それはいくさがつづきにつづいた戦国の世の中、傷ついた武者が傷ついた身をいやすために山中深くのいで湯に行く。それが「かくし湯じゃ」とトン坊は答えたが、「もういくさはあらへんのじゃろ」と、相手は誰から聞いて来たのかませた口をきく。「太閤さんが天下一統なさつて、もういくさはあらへんのじゃろ」とますます利発、小シヤクなことを言い出した。こういう利発、小シヤクなことは、とにかくトン坊がもつとも苦手とするところのもので、うまい言い返しのことばはないものかと口をもぐもぐさせたが、そこで彼の頭に二つうまい返事が浮かんで来た。

「かくし湯ちゆうのはな、<sup>おなご</sup>女子が毎日入つとると、キリヨウがようなる湯じゃ。」  
それから、もうひとつ。

「日本にはもういくさがのうなつても、太閤さん、チョウセンいうところでな、いくさをするんじゃ。」

一一

どちらの返事にも三番目の「わしがタカラモノ」はたいして納得した顔をしなかつたが、これでお判りのように、三番目は女子である。と言つても、もちろん、十一歳の小わつぽのことである。まだ女房を持つ身ではない。ガール・フレンドといきたいが、このいかついからだつきの大少年、美少年でもなければふところもからつぽ——とあつて、この女子は当然妹ということになる。トン坊はこの妹と二人きようだいたつた。

そのころにしてはその家、子供の数が少なすぎるではないかと、うるさいことをおつしやる人がいられるかも知れないが、いつの世の中でも、例外はあるものだ。それに靈験あらたかな有馬の湯の効き目もなかつたのかと言う人は当時のチリアクタたちの苦勞を知らぬ人だろう。今さら言うまでもないだろうが、くらし成り立たずとあつていくらでもオロしたことだろうし、生まれてもろくすつぽ食い物がなくて死んだのはいくらでもいた。「太閤さん」の時代の乳幼児死亡率はいかかなものだったか。さて、トン坊家のこの二人きようだいの一方の名をミン坊と言つた。これも、もちろん、通称、通名、アダ名である。年はトン坊の十一歳に対するに六歳。とにかく何歳の女子にしろ、「坊」とは何かということがまたまた問題になるかも知れないが、とにかくこの子、生まれながらのトン坊に劣らぬ野生の子で、有馬山中を彼といつしよに駆けめぐつていたものだから、色はまつ黒、着物はポロポロ、手足は兄貴の丸太のごときものとはちがつてそこは細長く、かつこうよくできていたが、切り傷、

アカぎれ、無数にこしらえた上に、まっ黒なアカだらけの顔に眼だけがキラキラ光っているとあつては、「坊」という呼び名がついてもふしぎはないだろう。実際、彼女ら一家と何かとつきあいの多い宿坊の下男たちには、彼女のことを男のいたずら小僧と思ひ込んでいる人はいくらかもいた。

「坊」のいわれはそれで判つた——ことにしておきたいが、それでは「ミン」のほうはどういうことになるか。これもうるさい詮議だてはやめにして、「おまはんはミンミンとうるさいセミみたいなやつやで」と、彼女のあまりの口達者、おしゃべりにへキエキしたトン坊の言い草からことは始まつたとしておこう。

しかし、この山中のセミのごとき小うるさい妹のことを、トン坊がなぜ三番目の——いや、心ひそかに三番目どころか一番目の「わしがタカラモノ」としているのかと言えば、答えはもう要するに、彼が彼女を好きであつた、当世風に言うならば、愛していたというほかにはないにちがいない。それゆえに彼が「かくし湯」の意義について「女子が毎日入つとると、キリヨウがようなる湯じゃ」と言つたのは、べつに女性一般について抽象的にことを述べたと見るべきではないだろう。やはり、彼女のことを念頭において言つていたと見るべきだ。そして、彼女は彼のそのひそやかな願望を知つてか知らずか、毎日、かくし湯に入りに行つた。トン坊も当然いっしょに出かけたが、ミン坊、「おまへはあつちに行つてるんじや」と邪ケンに大きなからだをもてあまし気味の心やさしい兄者人<sup>あにじやびと</sup>を追つ払つて、大男はただ岩<sup>い</sup>かげで、妹<sup>いもうと</sup>御の入浴のすむのを護衛しながら、しおらしく待つという仕儀になつたが、やはり、靈験あらたかな有馬の湯だけのことはある。まもなくミン坊、まっ黒な顔をしていたのが森のなかの眠り姫もかくやとばかり色白でツルツルの肌を持つ美少女に早変わりした。

物語はこの彼女が美少女に転身したあたりで始まるのだが、もうちょっとトン坊の家族構成のことを言っておくと、彼らの父親母親は宿坊であれこれ手伝い仕事をしてほそぼそと生計をたてていたチリアクタであつたが、もともと有馬の地に生まれ育つたチリアクタではなかつた。そこにどういふ事情があつたのかトン坊もよく知らなかつたが、大坂からはるばるとやつて来た流れ者であつた。それで、やはり、在の人とはどこかちがつたところがある。世の中のさまをもつと広い眼で見渡しているようなところがあつて、言うことも父親母親ともどときどき面白いことを言う。「太閤さん」がこのあいだ有馬の湯に一族郎党ひき連れてやつて来たときの思い出話をしていて、「サルが湯に入り来よつたんじゃ」と父親がそれはかなり平凡なことを言うと、母親は「ちがいますがな。サルがサル茶をやりに来よつたんですがな」と父親を上まわることと言つてのけた。それから、何を言っているのか判らぬ顔をしていたトン坊に、世には「茶の湯」といふ奇妙なしろものがあつて、お茶はただ飲めばよいものを何やらもつたいつけて小さな座敷にしかつめらしくみんな坐つて飲み合う。大坂のお城の本丸にすべて黄金こがねでつくつた組み立て式の茶の湯のための座敷があつて、そこでサルがお茶を飲む。サルのみわりで、サルの真似するお殿様連中がお茶を飲む。その座敷は天井も壁も黄金なら、お茶の道具も茶碗、ヒシヤクに至るまで金キラキンの黄金。「あんな茶碗でお茶を飲むとうまいかね」と父親は言つていたが、トン坊の家ではどこかの宿坊からくすねて来たフチの欠けた飯茶碗でお茶も飲む——と行きたいが、お茶は宿坊でもえらいさんが飲むもの。ただのお湯がトン坊たちの飲みものだったが、便利なのは、あのかくし湯の湯、そこまで行つてはトン坊とミン坊、からだも洗つたがお湯も飲んだ。ミン坊の肌がツルツルとつややかに白くなつたのも、かくし湯のお湯をしこたまハラワタに

入れたおかげかも知れない。

そうかと思うと、「太閤さん」、何を思ってから、黄金の座敷のゴーカケンランの逆を行って、あばら屋ふうの茶の湯の座敷もつくる。こちらは侘び茶わびというのだそうだが、座敷もあばら屋ふうにわざとぞんざいにつくってみせて、道具も湯呑みひとつと手ぬぐい一枚——ということになるのだが、その粗末な湯呑みひとつが誰やらのメキキがよろしいものとおスミつきを出すすたちまち千金、万金の値あたのものとなる。「いったいどういうことになっておるんやろ」と母親はブツブツ言い、一度そういうメキキ、うちの居ながらにしてのあばら家に来て、わが家のフチの欠けた飯茶碗にそういうおスミつきをいただけなものかとそのブツブツをつづけたが、横から父親は「メキキ先生もたいへんやで。こないだ、ひとり、太閤さんお気に入りメキキが切腹さされよつたらしいで」と興味なげに言った。

### 三

しかし、父親の話でトン坊をいちばんびつくりさせたのは、黄金の座敷にしろメキキ先生の切腹にしろ、そんな茶の湯の話ではなかった。それよりは、大坂には髪の毛がそれこそ黄金の座敷ならぬ黄金色、赤色、茶色で鼻が高くワシのような眼をした、そのうえ眼の色が奇怪にもミドリだという、肌色のほうも地が白いか日焼けしていつも酒に酔っぱらって赤くなつているといふバケモノが何人も来ているという話であった。着ているものもカラスのようなまっ黒いうえに尻のつぼまつたかたちの着物で、まさにバケモノにふさわしい姿かつこうだが、そういうバケモノがどこから来たのかと訊くと、「そう、カラテンジクからや」と父親は答える。「カラテンジクで、どこじゃ」と訊くと、「バ

テレンのいるところや」と答えは即座に返って来たが、「バテレンって何じゃ」というトン坊の質問には、「うるさいな。わしは仕事じゃ」と父親は答えてくれなかつた。「あれは呪術をやる人じゃ」とあとで答えてくれたのは、実は父親母親は大坂から有馬に流れて来るときに父親か母親かどちらかの遠縁にあたる二人より少し年下の男を連れて来ていたのだが、その男五助おじやんだつた。

「ジュジュツいうて、何んや」と訊いたのは、これはトン坊ではなくてミン坊のほうだつたが、「あんなを眠らせて殺してから、あんなのお尻の肉食べたり、男を女にしたり、女を男にしたりする、あんなをトン坊にしたり、トン坊をあんなにしたりしよるんや」と、風邪をひいているわけでもないのに鼻づまりでいつも鼻をぐずぐず言わせている五助のおじやんは自分がそのバテレンにでもなつたやうなこわい顔でミン坊をにらみつけたが、彼が期待したようにはミン坊はこわがらず、「五助のおじやんはん、バテレンのとこへ行つて、その鼻のわるいのんを治してもらいはつたらええで」とへらへら口を叩いた。五助のおじやんの鼻のぐずぐずがいつものことなら、ミン坊のへらへら口もいつものことだ。

この五助おじやんに、トン坊は一度、父親母親、それに五助おじやんまでが何んでまたそんな面白いバケモノやらバテレンがいたりするところから山のなかのいで湯のある、つまり、いで湯しかない有馬に流れて来たのかとそれとなく訊いたことがあるのだが、そのときにはいつも鼻をぐずぐず言わせながらへらへら笑いばかりしている五助おじやんがいつにない生真面目な顔をして、「わしら、ホンガンジのモント……」と言いかけたままことばを切つて、それから「こんなこと、おまはん、他の人に言うたらあかんぞ」と慌てて声をひそめながら言つた。うっかりいらぬことを言つてしもうたという後悔がありあり、五助おじやんののつぺらぼうみたいな長い顔に出ていた。

#### 四

父親母親は二人とも宿坊の手伝い仕事をして暮らしをたてていた。下男下女と言ってもよろしいが、それより下だったかも知れない。あくまで臨時備いの下男下女だったから、要するに、何か人手が足りなくなる、それなら、ちよつとあそこの流れもんのおぼはんを呼んで来いと宿坊Aの番人Bが考える。このしんどいごつつい力仕事にあの大力大男の流れもんを使うてやれと宿坊Cの番人Dが思いつくというぐあいには運んで、トン坊に似て大力大男の父親、ミン坊に似て美女の、いや、昔は少しは似ていたかも知れん母親はなけなしのたつき、の金を稼いでいた。あとは街のはずれに掘つ立て小屋を建て、川でサカナを捕り、山でクリを拾つて来て一家で食べると言うくらし——それをこれでもう何年やつて来たことになるのか。ときどき、一家に何も食うものがなくなつて家族一同がじつとしているうちに父親は姿を消し、しばらくして帰つて来たときには大根一本手にしていた、というようなことはときどきあつたが、あれはその大根一本、誰かにお情けでもらつて来たのか、それともどこかの島で一本ひっこぬいて来たのか。

五助おじやんのほうは、宿坊に住み込みで働かれている下男で、まだひとり者だったから、うまいこと宿坊を抜け出して来ては掘つ立て小屋にやつて来た。五助おじやんも貧しかったが、とりえは宿坊のお客に出す料理の残りものを平らげたり、そこらにおいてあつたお菓子をちよろまかす、いや、お客の飲み残しのオミキまで失敬していただくという芸当が可能だったことで、ときどきはふところちよろまかして来たお菓子をつん坊たちのためにに入れて来てくれたりした。

「太閤さん」がおサルそつくりの顔をしている男だと最初に教えてくれたのは、この五助おじやんだつた。大坂にいたときには噂に聞いていただけで実際に見る機会はなかったが、「太閤さん」がこのあいだそれこそ「サル湯」をやりにはるばるとこの山中にまでやって来たときには、彼の宿坊に「太閤さん」は泊まつたから、一度きりだったか庭で掃除をしていたときに縁側まで突然出て来た「太閤さん」の顔を見る機会があつた。何人もの女がそばについていて、みんななかなかのキリヨウよしだったから、名うての女好きの「太閤さん」のことである、ああ、これだけのキリヨウよしたちがこの「天下人」の数ある奥さん、側室かと五助おじやんは天を仰いで嘆息する思いになったが、かんじんの「太閤さん」は、その顔は色が黒いうえに小さく万事が縮こまつた感じで、さえないことおびたらしい。髪の毛のほうも禿げ上がっていて、「太閤さん」が昔、家来として仕えていたノブナガ公は彼のことをいつも「はげネズミ」と呼んでいたそうだが、まさにその感じだ。これは五助おじやんの宿坊の下男仲間でも「はげネズミ」と呼ばれる男から聞いた話だが、ノブナガ公は「太閤さん」のことをしょつちゆう「はげネズミ」と言ったり、「サル」と言ったりしていた。それにいただけなのは、彼の小柄なからだである。「天下人」と言われるからには堂々の偉丈夫かと思つたら、そこらにいくらでもいるようなただの小柄なじいである。横のキリヨウよしの女たちのほうがこのじいにくらべると、よほど堂々として見えた。

ただ、問題なのは、その小柄な、それこそそこらのじいいの眼であつた。そこだけ、その眼とちがつて、眼光鋭くあたりを見まわしているうちにその猿の眼、あるいは「はげネズミ」の眼、ハタと遠くからもめざらしげに縁側を見ていた五助おじやんの眼とあつた。

とたんに五助おじやん、射すくめられたようになって全身硬直、次の瞬間には横つ飛びにすつ飛んで姿を消したのは、「あの怪しいやつをひとつとらえよ」とでもいうことになったらえらいことになる、とつさの判断あつてのことだった。

「太閤さんはサルはサルでも、やつぱし、ただのサルとはちがうで」とその話をしてトン坊には口癖のように言つても、トン坊の父親母親には一切そんなことを言わないのは、ねつからのサル嫌いの父親母親の気持ちをおもんばかつてのことなのにながいがいない。五助おじやんはトン坊にはそう言つたあとで「ホンマにあの人、さすがにゾーリ取りから天下人になつた人だけのことはあるで」と、これもまた口癖のように言つていた。いや、そのあと、これもまたこうつづけるのが、このころの彼の口癖になつていた。

「トン坊、おまえも天下人になれ。あつちがサルなら、おまえはイノシシや。さしずめこの山中に住むイノシシやな。サルに負けたらあかん。」

「わたしはどうやねん。わたしは天下人になれへんのか。」

と虫も殺さぬ無邪気な顔をその顔にふさわしい甘えた口調で、こういうとき、ミン坊は必ず五助おじやんに難くせをつける。

「わたしはネコやろ。かわいいネコさんやろ。そやけど、ネコは子ネコでもはげネズミに勝つて、食べでしまひよるで。」

「シツボぐらいはな。」

五助おじやんは苦虫を噛みつぶした顔で言つた。

## 五

この五助おじやんが宿坊の下男仲間から——たぶん「もの知りの源やん」からでも聞いて来た話だろうが、「太閤さん」がチョウセンという、カラテンジクほどは遠くはないが、大きな海を越えてむこうの国でいくさをするという話をトン坊に教えてくれたのである。宿坊のえらいさんが、最近用事があつて大坂を経てミヤコまで行つたのだが、大坂でもミヤコでも、チマタは「太閤さん」の「朝鮮征伐」の話でもちきりになつていた。そのチョウセンという国を通過してカラテンジクまで「太閤さん」は軍隊を進めようとしているのだが、チョウセンの連中、王様以下が判らずやにも「太閤さん」の中の道を通してくれという頼みに応じない。それで、やむなく「朝鮮征伐」に出かけなければならなくなつたというのだが、何んでまたカラテンジクというような遠いところまで軍勢を進める必要があるのか。そこはよく判らないのだが、「太閤さん」、このあいだできたばかりの赤子をよわい齢わずか三歳にして失うという悲劇にあつて、多少やけのヤン八、いつちようやつたるかという気になつてゐるんじゃないか。

とにかく、「太閤さん」は子供を亡くして悲嘆このうえない。お寺へ出かけてマゲまで切つてしまつたのだが、お供に来たまわりのお殿様もことごとくマゲを切つたというのだから、ほんまにえらいさんもたいへんでつせ。そのマゲを切つたえらいさんをまわりに集めて、「太閤さん」、言いはつた。おのれ、わが子のカタキを討ちにカラテンジクまで行くぞ。チョウセンを征伐するぞ。

「者ども、よくくり申したか。」

「よく判り申した。」

えらいさんども、みんなマゲを切った頭をたれて平身低頭。さあ行くぞ。行かんとあかんぞ。行かんとしようがない。行かんとサルにやられますぞ。

「とにかく、たいへんみたいでつせ。ミヤコも大坂も……」

五助おじやんは見て来たような言い方をした。

「このあいだここに太閤さんがやって来たときは、あれはよう考えてみたら、子供はんが死んですぐあとのことですよ。子供はんが死んでからすぐ清水寺へ行きはって、そこからここへ来はったということでしたけど、あるときにはもうチョウセン征伐を決めてはったんや。」

五助おじやんは感心したふうに言ったが、トン坊の父親は例の感心に水をぶっかけるような言い方をした。

「サルはマゲは切つとつたんやろ。おまはん、あのサルを庭から見たんやろ。」

サルににらまれて横つ飛びにすつ飛んで逃げたせいで五助おじやんはそこまではたしかめなかったのかも知れない。それでごまかすように、大坂の「太閤さん」の城にあつた組み立て式の茶の湯用の黄金の座敷の話をひとくさりやつてのけた。

といつて、たいした話があつたわけではない。とにかくすでにマゲを切った全国のお殿様の面々に出動の命令が下つて、朝鮮に海ひとつまたいで渡れる九州の北の端にこのあいだつくつたばかりの山城めがけて続々と軍勢は集結しつつあるのだが、その組み立て式の黄金の座敷もすでに大坂の城から引き出されて、船で九州の山城に運ばれつつある。

お城と言つても、もとはそんなところには何もなかったのだが、ここがよし、建てろとなつての大突貫工事、半年もたたないあいだに五層七重の天守閣はあるわ、二の丸、三の丸のお城はあるわ、城下町の家並みも立派に出来上がるわで、出来上がったそのお城に、今、全国諸国のお殿様のその家中、一族郎党、諸国の軍勢につけ加うるに馬具かつぎ、荷物かつぎの人夫、ひと商売あてこんでの商人、彼らの家族の女子供、それから何やらあてこんでのキリヨウよしの女子衆に能役者、ああそれからもちろん、黄金の座敷で催される茶の湯の世話係のメキキの先生——。

「そやけど、そこに持つて行きよつたのは黄金の座敷ばかりやないらしいで。あばら家の座敷のほうも持つて行きよつたという話や。」

どこから聞いて来たのか、トン坊の父親は五助おじやんのことばの先まわりをするように言つた。

「そやけど、そのお城、何ちゆう名前のお城や。」

「ナゴヤ……ナゴヤというんや。」

トン坊は訊ね、五助はそう答えたが、とたんにトン坊の胸のなかでゴトリと動くものがあつた。

つづきは製品版でお読みください。